

## 稲武・指導員養成講習会報告

名古屋支部 安井 弘

昨年はコロナ禍のため中止されたこの会も、今年は10月10日(日)に行うことが出来ました。

豊田市稲武町にある面の木原生林にて、新指導員5名(2019年度生4名・2021年度生1名)を含む13名が参加し、西三河支部の山本博美さんと水谷宗保さんにご案内頂きました。

### 面の木原生林とは・・・

豊田市北東部、稲武町の天竜奥三河国定公園内にある自然園地で、標高1,000m～1,200mにあります。単純計算になりますが、名古屋市内の緑地より気温は6～7℃低く、名古屋市が暖温帯に属するのに対し冷温帯に属します。樹林帯の構成樹木種も異なり、ブナやカエデ類を中心とした構成となります。

今年は10月に入っても気温の高い状態が続き、残念ながら紅葉は始まっていませんでしたが、例年の美しいであろう情景が想像できました。

### 人工林帯から天然林帯へ

歩き始めは人工のスギ林です。この地域は明治の頃から林業が推奨され、スギやヒノキが多く植えられています。「人工林は人が手を入れないといけない」のですが樹冠が閉じてしまっている現在、暗くなってしまった林床は稚樹が育たない。ヤマザクラの200年ものの個体もあるがその跡継ぎがなく、将来的には暗い林内でも耐えられる樹種のみになってしまうかも、との事でした。ところどころに樹種として混じるモミは大気汚染に弱いために、名古屋ではほとんど見る事が出来ません。

「ブナの幹に地衣類がよく生えていますすがなぜでしょう？」と尋ねられました。

ブナの葉は厚く固く、葉脈も鋸歯の窪んだところに繋がっています。若干上向きに並ぶ葉は雨水を集め、集まった雨水は小枝を通り、大枝に流れ、最後は樹幹流となって根元に届きます。そのため、幹に地衣類が生えやすいのだそうです。水が好きなブナの工夫、落葉も水を保持するのに、役立ち天然の貯水池のいわれを感じました。

### 普段観られない樹ばかり

名古屋周辺で親しみのあるコナラはありません。コクサギに始まり、フサザクラ、葉だけをみるとカエデ類とは思えない三出葉のメグスリノキ、全く分かれていない葉のチドリノキやサロメチール臭のするミズメ、オオバアサガラ、イヌブナ、北海道にも分布するオヒョウなどなど。樹種ごとに逸話などを解説して頂きました。

### これからのブナ林

天然のブナ林が完成するのに600～800年かかるとのこと。近年、林床のスズタケが枯れ、稚樹が育つチャンスなのですが、問題として①温暖化で雪がなく、稚樹を乾燥と寒さから守りにくい②下刈りの際、稚樹も刈られてしまっている(人為的な要素)の二点があるとのこと。

ムササビやモモンガなどの貴重な動物も育っているこの森、春には美しい花が林床に咲くであろうこの森を、次世代に繋げていくことが我々の責務であると考えます。



振り返り